

## 「日本の「新書」の形が目指したものとその変遷」

パリ・シテ大学 大野舞

新書という名の下でひとつのコレクションが創刊されたのは1938年の岩波書店による「岩波新書」が初めてだ。そして、特に1960年代以降からは多くの出版社が新書レーベルを出すようになり、今日まで発展を続けてきた。新書というのはあくまで「本のサイズ」ではあるが、一貫したテーマとして社会に広く教養を伝えることを目的としている。

岩波茂雄は岩波新書を通すことで日本文化への貢献を目指すことを説いている。こうした意図を基盤として生まれた新書は、日本文化の一部として、文化史として描くこともできる。一方、本稿では「新書」には「モノ」としての一面もあることに言及し、新書を「物質文化」として捉えることの意義を検証する。

テキストというのはモノがなければ存在できない。本という媒体を通すことによってテキストは初めて可視化される。テキストを「モノ＝商品にする」ということは、その内容をいかに完璧にするのかということ以上に、実は時間の制限なども重要になってくる。モノに着目をするということは、そこに携わる多くのアクターがそれぞれどのように相互に依存し合っているのか、どのような交渉をしているのかを明らかにすることでもある。

未だ西洋の書物史では日本という文化圏の特殊な「新書」を扱った研究はなく、一方、日本においても、新書を日本の「物質文化」として捉えた研究はまだない。ここに本研究が貢献しうる点があるだろう。

新書が何を目指していたのかを問う際に重要な点は、ブルデューによる本の二重性、つまり経済的な意味での商品としての本と、象徴的な意味での本という二つの側面だ。新書が世に出るためには出版社がなければならないが、その出版社は企業体であり、経済事業としてその出版活動を成立させなければならない。

さらに、「新書」に着目する上で「教養」という概念は外すことができない。

「教養主義」という明治からの文化的背景があり、それと並行して書物史の流れがあり、「新書」が生まれた。新書を物質文化として捉えた上で、歴史的な観点（書物史）を加えることも重要だ。

いかに新書は「モノ」として生き延びてきたのか。その歴史的な変遷から見えてくるものもあるが、今日、具体的にどのように新書が作られているのかという生産過程に着目することで新たな示唆も得られると考える。

いわゆる「教養新書」が目指したもの、基盤としてきたものである「教養」は、今日、デジタル化など様々な要因が重なり「衰退」しているとも言われる。それでは現代の新書は何を目指しているのか。今回の報告はこのような問いに対し、新書の生産過程を通して答えるという新たな試みの一端でもある。